

本因妙の教主本門の大師日蓮謹んで之を結要す。

万年救護写瓶の弟子日興に之を授与す云云。脱種合して一百六箇之在り。

靈山浄土多宝塔中久遠実成無上覚王の直授相承、本迹勝劣口決相伝の譜、久遠名字已来本因本果の主、本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕、本門の大師日蓮詮要す。

- 一、理の一念三千・一心三觀の本迹 三世の諸仏出世成道の脱益寿量の義理の三千、釈迦諸仏が仏心の妙法蓮華經の理觀の一心に蘊在せる理なり。
- 二、大通今日法華の本迹 久遠名字本因妙を本として中間・今日下種する故に、久成を本と為し、中間・今日の本迹を俱に迹と為す者なり。
- 三、応仏一代の本迹 久遠下種・靈山得脱・妙法値遇の衆生を利せんが為に、無作三身寂光浄土より三眼三智をもって九界を知見して迹を垂れ、権を施し、後に妙經を説く故に、今日の本迹共に迹と之を得る者なり。
- 四、迹門を理円一致と為すの本迹 松柏風波万声一如、諸法実相の理の上の觀心は、応仏の域を引かへたる故に、本迹とは別くれども、只理の上の法相なれば本迹理觀の妙法と顯はず。迹化は付囑無きが故に之を弘めず。
- 五、心法即身成仏の本迹 中間・今日も迹門は心法の成仏なれば、華嚴・阿含・方便・般若・法華の安樂行品に至るまで円理に同ずるが故に、迹は劣り本は勝るゝ者なり。
- 六、心法妙法蓮華經の本迹 山家の云はく「一切の諸法は本従り已来、生ぜず滅せず性相凝然たり、釈迦は口を閉ぢ身子は言を絶す」云云。方便品には理具の十界互具を説く。本門に至っては顯本理の上の法相なれば、久遠に対して之を見るに、実相は久遠垂迹の本門なる故に色法に非ざるなり。
- 七、從因至果中間・今日の本迹 像法の修行、天台・伝教弘通の本迹は、中間・今日の迹門を因と為し本門修行を果と為るなり。

八、本果の妙法蓮華經の本迹 今日の本果は従因至果なれば本の本果には劣るなり。寿量の脱益、在世一段の一品二半は、舍利弗等の声聞の為の觀心なり。我等が為には教相なり。情は迹は劣り本は勝るとなり。又滅後像法の相似・觀行の解了の行益も以て是くの如し。南岳・天台・伝教の修行の如く末法に入って修行せば、帶權隔歴の行となりて我等が為には虚戲の行と成るべきなり。日蓮は一向に本、天台は一向に迹、よく能く之を問ふべきなり。疏の九に云はく「爾前は皆虚にして実ならず、迹門は一実一虚、本門は皆実にして虚ならず」云云。爾前二種の失の事、一には行布を存するが故に仍未だ權を開せずとて、迹門の理の一念三千を隱せり。二には始成を言ふが故に尚未だ迹を發せずとて、本門の久遠を隱せり。迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて、爾前二種の失一つを脱れたり。本門に至りて迹門の十界の因果を打ち破る、是即ち本因本果の法門なり。実の一念三千も顯はれず二乗作仏も定まらずと云云。世間の罪に依って惡道に墮ちん者は爪上の土、仏法に依って惡道に墮ちん者は十方の土の如し。其の故は信心の根本は本迹勝劣、余の信心は枝葉なり。

九、余行に渡る法華經の本迹 一代八万の諸法は本因妙の下種を受けて説く所の教々なるが故に、一部八卷乃至一代五時次第梯橙は、名字の妙法を下種して熟脱せし本迹なり。

十、在世の觀心法華經の本迹 一品二半は在世一段の觀心なり、天台の本門なり。日蓮が為には教相の迹門なり云云。

十一、脱益の妙法の教主の本迹 所説の正法は本門なり、能説の教主釈尊は迹門なり。法自づから弘まらず、人、法を弘むるが故に人法ともに尊し。

十二、脱益の今此三界の教主の本迹 天上天下唯我独尊、釈迦牟尼如来は迹身門なり、密表寿量品の「今此三界」は即ち本身門なり。

- 十三、脱益の像法じこく時尅弘經の本迹 天台の本迹は俱に日蓮が迹門なり。時尅亦天地の不同これ之在り。
- 十四、脱益の迹門の修行の本迹 正法一千年の修行の徳より、像法一日の修行の徳は勝れたるなるべし。
- 十五、脱益の迹門じげぶつじょうの自解じげ仏乘ぶつじょうの修行の本迹 熟益は迹、脱益は本なり。之に就いて之を思惟しゆいすべし。
- 十六、脱の五大尊の本迹 他受用たじゅうおうぶつ応おう仏ぶつは本、普賢ふげん・文殊もんじゆ・弥勒みろく・薬王やくおうは迹なり。
- 十七、脱の真俗二諦の本迹 天台大師弘通の本迹は前の十四品を迹門に約し、後の十四品を本門に約す云云。「是法住ぜほうじゅうほうい法位せけんそう、世間相じょうじゅう常住」文。
- 十八、前十四品はことごと悉く流通分の本迹 如来の内証は序品より滅後正像末の為なり。薬王菩薩は像法の主天台是なり。密表の法師品に云はく「今此三界」と。
- 十九、脱益の理観一致の本迹 「本迹こと殊なりと雖も不思議一」と云ふは、今日乃至中間の本迹は本迹と分別すれども、本因妙を下種として説く所の本迹なれば、迹の本は本に非ず云云。
- 二十、脱益の戒体の本迹 爾前・迹門、熟益の戒体を迹とし、脱益の戒体を本とするなり。迹門の戒は爾前・大小の戒に勝れ、本門の戒は爾前・迹門の戒に勝るゝなり。
- 二十一、脱の迹化七面の本迹 像法には理観を本と用ゆるなり。故に天台は迹を本と為し、本を迹と行ずるなり。
- 二十二、脱の迹化の本尊の本迹 一部を本尊と定むるに前の十四品は迹、後の十四品は本なり云云。是は一部八巻なり云云。
- 二十三、脱益の守護神の本迹 守護する所の法華は本、守番し奉る処の明神等は迹なり。本因妙の影を万水に浮かべたる事治定なり云云。
- 二十四、脱益山王さんのうの本迹 久遠・中間に受くる処の法華は本、夫より守り来たる所は垂迹なり。下種は本因妙なり云云。
- 二十五、脱迹じゅうらの十羅刹女せつによの本迹 久遠・中間・今日の理事は本、中間・大通・今日出世して冥守みょうしゅする処は垂迹なり。下種は前の如し云云。
- 二十六、脱迹の付嘱の本迹 脱益の迹化付嘱は中間・大通を本とし、今日初住しよじゅうの

終はりを迹とするなり。受くる正法は本、持つ方は迹なり。

二十七、脱迹の開会の本迹 大通の初めを開と云ひ、今日初住の終はりを会と云ふなり。本は大通、迹は初住なり。初めて顕はるゝを開と云ひ、終はりを合するを会と云ふなり云云。案位も理の上の案位なり。

二十八、脱益の成仏の本迹 寿量品は本、応仏は迹なり。無作三身が寂光土に住し、三眼・三智を以て九界を知見す云云。

二十九、脱迹の三種教相の本迹 二種は迹にして開会無し、一種は本有の開会なり。一種は開顕、二種は不開顕にして、所従眷属の教相なり云云。

三十、脱の五味所従の本迹 天台伝教の五味は横豎共に所従なり。五味は本、修行の人は迹なり。在世以て此くの如し云云。

三十一、脱迹の父子の本迹 応仏は本、迹化は迹なり。「子、父の法を弘むるに世界の益あり」云云。

三十二、脱迹の師弟の本迹 義理共に上の如し。「是我が弟子応に我が法を弘むべし」云云。

三十三、脱益の感応の本迹 久遠の天月の影を中間・今日の脱益の水に移すなり。「衆生久遠に仏の善巧を蒙る」とは是なり。

三十四、脱益の寂照の本迹 理の上の寂照は妙覺乃至觀行等の解了なり。理即の凡夫は無体有用の本迹なり。

三十五、脱益の隨縁・不変の本迹 在世と像法と之同じ。真如の義理なり。隨縁も不変も共に理の一段の本迹なり。

三十六、脱益の九法妙の本迹 三法妙に各三法妙を具すれば九法妙なり、法中の心法妙より起こる所の生仏の二妙なり。本迹は知るべし。

三十七、脱益の八相・八苦習合の本迹 八相は本、八苦は迹なり。同体の權實是なり。

三十八、脱益の灌頂等の本迹 灌頂とは至極なり。後世の仏・菩薩の灌頂は法華經なり。迹門の灌頂は方便読誦、欲令衆生開仏知見なり。本門の灌頂は寿量品読誦、然我実成仏已来なり。

三十九、脱益の説所と戒壇の本迹 靈山は本、天台山は迹。久遠と末法とは事行

の戒^事理^戒。今日と像法とは理の戒体なり。

四十、脱益の三世三仏^{りやく}の利益の本迹 世々番々の教主は本、所化の衆生は迹なり。
世々已来常に我が化を受け、番々に出世して師と俱^{とも}に生ず。

四十一、脱益の証明^{しょうみょう}多宝仏塔の本迹 妙法蓮華經^{かいぜしんじつ}皆是真實は本、多宝仏は迹なり。
迹門八品乃至本門は之を指すなり云云。

四十二、脱益の序・正・流通現文の本迹 經文釈義の如く、理の上の正宗流通
序分なれども本は勝れ迹は劣るなり。
然るに迹は本無^{こんぬ}今有なれば、久遠の迹を脱として今日の本を説くなり云云。

四十三、脱益の摂受^{しょうじゅ}・折伏^{しゃくぶく}の本迹 天台は摂受を本とし折伏を迹とす。其の故
は像法は在世の熟益^{みょう}冥^{ぶくちくそく}の故なり。福智具足の故にと云へり。

四十四、脱益の二妙の本迹 相待^{そうたいみょう}妙^{ぜったい}は迹、絶待妙は本なり。「妙法の外に更に一句の余經も無し」云云。「獨一法界の故に絶待と名づく」の釈^{これ}之を思ふべし。

四十五、脱益の十妙の本迹 本果妙は本、九妙は迹なり。在世と天台となり。機の上の理なり。仏は本因妙を本と為し、所化は本果妙を本と思へり。

四十六、脱益の六重所説の本迹 已^{いこん}今を本と為し余は迹なり。「本迹^{こと}殊なりと雖も不思議一」云云。理具の本迹なれば一部俱に迹の上の本迹なり。

四十七、脱益の六即所判の本迹 妙覺は本、余は迹なり。
玄の九に云はく「初めの十住を因と為し十行を果と為す、十行を因と為し十回向を果と為す、十回向を因と為し十地を果と為す、十地を因と為し等覺を果と為す、等覺を因と為し妙覺を果と為す」云云。

四十八、脱益の十不二門の本迹 理の上の不變の不二にして、事行の不二門には非ざるなり。

四十九、脱益の十界互具の本迹 理具の十界互具にして事行の互具には非ず。九

界の理を仏界の理に押し入るゝ方ならでは脱せざるなり。

五十、脱益の十二因縁・四諦の本迹 經に云はく「無明乃至老死」云云。苦・集・滅は迹なり、道諦は本なり。

五十一、脱益の三土の本迹 報土は本、同居と方便は迹なり。

妙楽云はく「雖脱在現」と。本迹理の上の一致なりと。心は寿量品も文は現量なれども、上行所伝の本因妙を唱へ顯はして後は、只久遠の教相にて成仏の肝要たる觀心には非ず云云。

籤の一に云はく「本中の体等は迹と殊ならず」と。脱益の妙覺乃至觀行・相似等の妙法蓮華經は理に即して事を含む、然れども本迹一致に非ず。破廢して本を立つ云云。

玄の七に云はく「權實は智に約し教に約す」と。化他不定の時、施す所の權實八教なり。

「兩處殊ならず」と。久遠の本と今日の脱益と兩處なり。

籤の七に云はく「理に浅深無し故に殊ならずと曰ふ」と。本因本果の理を、今日・中間にも寿量顯本の理に推し入れて顯はすと釈するなり。

籤の七に云はく「經に約すれば是本門と雖も、既に是今世迹中の本を名づけて本門と為す。故に知んぬ、今日は正しく迹中の利益に当たる。乃至本成已後俱に中間と名づく、中間本を顯はすに利益を得る者尚迹の益を成ず。況んや復今日をや」文。意は久遠本果の迹を中間・今日の本と為す。又久遠名字の妙法の影を中間・今日に垂迹する故に、下種に対して脱益寿量を迹と得たる証拠に釈する是なり。

疏の一に云はく「衆生久遠に仏の善巧を蒙る」と。久遠は下種、靈山は得脱。

籤の十に云はく「故に知んぬ、今日の逗会は昔の成就の機に赴く」と。靈山下種、久遠得脱の益。

記の二に云はく「本時の自行は唯円と合す」と。本時とは本因妙の時なり。「化他は不定、亦八教有り」と。中間、今日化導の儀式なり。

玄の七に云はく「迹の本は本に非ず」と。今日本果妙の事なり。「本の迹は迹に非ず」と。本因妙の事なり。「本迹殊なりと雖も不思議一」と。本因妙の外全く迹無きなり。

迹門は即ち顯本の後は本無今有の方便無得道なりと。中島の証俊に何と問われし時、俊範法印答へて云はく、不思議一と。求めて云はく、其の義如何。答へて云はく、文は迹門に在り義は本門に在り云云。会して云はく、迹門既に益無し、本門は益有り。本迹勝劣不思議一云云。

妙楽云はく「權實は理なり、本迹は事なり」と。天台云はく「本迹を二經と為す」と。

如来の本迹は理の上の法相なり、日蓮の本迹は事行の法相なり。

以上脱の上の本迹勝劣の口決畢んぬ。

- 一、事の一念三千・一心三觀の本迹 釈迦・三世の諸仏・菩薩・声聞・縁覺・人
・天の唱ふる方は迹なり、南無妙法蓮華經
は本なり。
- 二、久遠元初直^{じきぎょう}行の本迹 名字の本因妙は本種なれば本なり、本果妙は余行に渡
る故に本の上の迹なり。久遠の釈尊^{くしやう いま}の口唱^{くしやう いま}を今日蓮直
ちに唱ふるなり。
- 三、久遠実成^{じきたい}直^{じきたい}体の本迹 久遠名字の正法は本種子なり。名字童^{どうぎょう}形^{どうぎょう}の位の釈迦は
迹なり、我本行菩薩道^{これ}是なり、日蓮が修行は久遠を移せ
り。久遠本果成道は本の迹なり。名字の妙法^{たも}を持つ処は
直体の本門なり、直ちに唱へ奉る我等は迹なり。
- 四、久遠自^じ受^じ用^{じゅう}報^{ほう}身^{しん}の本迹 男は本、女は迹、知り難き勝劣なり。能^よく能^よく伝流
口決すべき者なり。
- 五、久遠の本門^{じ えん}を事^じ円^{えん}と為すの本迹 上行所伝の妙法は名字本有の妙法蓮華經な
れば事理俱勝の本なり。日蓮並びに弟子檀
那等は迹なり。
- 六、色法即身成仏の本迹 親の義なり父の義なり。涌出品より已後我等は色法の成
仏なり。不渡余^{ふ とよぎょう}行の妙法は本、我等は迹なり。
- 七、色法妙法蓮華經の本迹 男子と成って名字の大法を聞き、己々物々事々本迹
を顕はす者なり。又今日の二十八品、品々の内の勝
劣は、通号は本なり勝なり、別号は迹なり劣なり云
云。
妙^{みょうらく}楽^{らく}の疏記の九に云はく「故に知んぬ、迹の実は本
に於て猶^{なほ}虚なり」と。籤^{せん}の十に云はく「今日は初成
を以て元始と為し^前、迹門は大通を以て元始と為し^{迹門}、
本門は本因を以て元始と為す^{本門}」と。此の釈は元始
の本迹、遠近の勝劣を判ずるなり。本果妙は然我実
成仏已来、猶迹門なり。迹の本は本に非ざるなり。
本因妙は我本行菩薩道、真実の本門なり。本の迹は
迹に非ず云云。我が内証の寿量品は迹化も知らず云云。
重位秘蔵の義なり。本迹と分別する上は、勝劣は治
定なれども、末代には知り難き故に云云。
- 八、久遠^{じゅう か こういん}従^{じゅう}果^か向^{こう}因^{いん}の本迹 本果妙は釈迦仏、本因妙は上行菩薩、久遠の妙法は果、
今日の寿量品は花なるが故に、従果向因の本迹と云ふな

り。

- 九、本因の妙法蓮華經の本迹 全く余行に分かたざりし妙法は本、唱ふる日蓮は迹なり。手本には不^ふ輕^{きょう}菩薩の二十四字^{これ}是なり。又其の行儀も是なり云云。
- 十、不^ふ渡^と余^よ行^{ぎょう}の法華經の本迹 義理上に同じ。直達の法華は本門、唱ふる釈迦は迹なり。今日蓮が修行は久遠名字の振る舞ひに介^け爾^に計^{ばか}りも違はざるなり。
- 十一、下種の法華經の教主の本迹 自受用身は本、上行日蓮は迹なり。我が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり。其の教主は某なり。
- 十二、下種の今此三界の主の本迹 久遠元始の天上天下唯我独尊は日蓮是なり。久遠は本、今日は迹なり。三世常住の日蓮は名字^りの利^{しょう}生なり。
- 十三、下種の得^{とく}法^{ほう}觀^{くわん}心^{しん}の本迹 久遠下種の得法は本なり、今日^{こんにち}・中間^{ちゅうげん}等の得法觀心は迹なり。分別功德品^{しよずいき}の名字初隨喜の文の如し云云。
- 十四、下種の自^じ解^げ仏^{ぶつ}乘^{じょう}の本迹 名字の妙法を上行所伝ぞと聞き得たる方は自解仏乘の本なり。聞き得て後受持する我等は迹なり。故に伝教より日蓮は勝るゝなり云云。
- 十五、末^じ法^{こく}の時^じ尅^{こく}の弘通の本迹 本因妙を本とし、今日寿量の脱益を迹とするなり。久遠の釈尊の修行と、今日蓮が修行とは介^け爾^に計^{ばか}りも違はざる勝劣なり云云。
- 十六、本門の修行の本迹 正像二千年の修行は迹門なり、末法の修行は本門なり。又中間・今日の仏の修行より、日蓮が修行は勝るゝ者なり。
- 十七、本門の五大尊の本迹 久遠本果の自受用報身如来は本なり、上行・無辺行・淨行・安立行の四菩薩は迹なり。
- 十八、日蓮の本門弘通の本迹 本因妙は本なり、我本行菩薩道は迹なり云云。
- 十九、本化の事行一致の本迹 「本迹^{こと}殊なりと雖も不思議一」云云。本因妙の外に並びに迹とて別して之無し、故に一と釈する者なり。眞実の勝劣の手本の義なり云云。
- 二十、後の十四品皆流通の本迹 本果妙の釈尊が本因妙の上行を召し出だす事は、一向に滅後末法利益の為なり。然る間日蓮が修行

の時は、後の十四品皆滅後の流通分なり。

- 二十一、下種の戒体の本迹 爾前迹門の戒体は権実ぞうらん雜乱、本門の戒体は純一無雜むぞうの大戒なり。勝劣は天地・水火なお尚及ばず、具つぶさに戒体抄の如し云云。
- 二十二、本化の七面の本迹 末法には事行を本とし、在世と像法とには理觀を本とするなり。天台の本書は理の上の事なれば一向に迹門の七決、我が家の本書は事の上の本なり。
- 二十三、下種の三種の法華の本迹 二種は迹、一種は本なり。迹門は隱密法華おんみつ、本門は根本法華、迹本の文底の南無妙法蓮華經は顯說法華なり。
- 二十四、本化の本尊の本迹 七字は本なり、余の十界は迹なり。諸經・諸宗中王の本尊は万物下種の種子無上の大曼荼羅なり。
- 二十五、下種の守護神の本迹 守護し奉る所の題目は本、護る所の神明しんめいは迹なり。諸仏救世者・現無量神力云云。
- 二十六、下種の山王神の本迹 久遠に受くる所の妙法は本、中間・今日・未来までも守り来たる所の山王明神は即ち迹なり。
- 二十七、下種の十羅刹女の本迹 此の義理上に同じ。唯ただ神明と十女とを本迹に対する時、十羅刹女は本、神明は迹なり。
- 二十八、本門付嘱の本迹 久遠名字の時受くる所の妙法は本、上行等は迹なり。久遠元初けっちようの結要付嘱と日蓮が今日寿量付嘱とは同意なり云云。
- 二十九、本門開會かいえの本迹 久遠の本会を本と為し、今日寿量の脱を迹とするなり。妙楽云はく「始顯を開と云ひ、終合を会と云ふ」文。
- 三十、下種の成仏の本迹 本因妙は本、自受用身は迹なり。成仏の難きには非ず、此下種本因の經たもを持つこと難ければなり云云。
- 三十一、下種の三種教相の本迹 二種は迹門、一種は本門なり。本門の教相は教相の主君なり。二種は二十八品、一種は題目なり。題目は觀心の上の教相なり。
- 三十二、五味主の中の主の本迹 日蓮が五味おうじゆは横豎共に五味の主の修行なり。五味は即ち本門、修行は即ち迹門なり。
- 三十三、本種の師弟不変の本迹 久遠実成の自受用身は本、上行菩薩は迹なり。三世じようごう常恒不変の約束なり。
- 三十四、本種の父子常住の本迹 義理上に同じ。久遠の名字ぞくたい即の俗諦常住の父子

は、今日蓮が修行に殊ならず。世間相常住とは是なり。

三十五、四土具足の本迹 三土は迹、常寂光土は本なり。四土即常寂光・寂光即四土の浄土は唯本門弘經の道場なり。

三十六、下種の感應日月の本迹 下種の仏は天月、脱仏は池月なり。天台の云はく「天月を識らず但池月を觀ず」云云。

三十七、下種の隨縁不變の本迹 体用同時の眞實の眞如一口の首題なり。本有の迹、本有の一念三千是なり。隨縁不變一念寂照の本迹なり。

三十八、下種の九法妙の本迹 久遠下種の妙法は本、已來の九法は迹なり。

三十九、下種の人天の本迹 久遠下種の妙法は本、已來の人天は迹なり。

四十、下種の八相八苦習合実勝の本迹 脱の八相は迹、種の八相は本なり。脱の八苦は迹、種の八苦は本なり。煩惱即菩提・生死即涅槃、常在此不滅と云へり。

四十一、下種の最後の直授摩頂の本迹 久遠の一念元初の妙法を受け頂く事は、最極無上の灌頂なり。法は本、人は迹なり。

四十二、下種の弘通戒壇実勝の本迹 三箇の秘法建立の勝地は富士山本門寺の本堂なり。

四十三、下種の寂照の实事、体用無上の本迹 生仏一如の事の上の本覺の寂照なり。人は迹、仏は本なり云云。

四十四、下種の三世三仏実益の本迹 日蓮は下種の利益、三世九世種熟脱本有一念の利益なり。天台云はく「若しは破、若しは立皆是法華の意」の修行の利益なり。

四十五、下種の証明多宝仏塔の本迹 久遠実成無始無終本法の妙法蓮華經皆是眞實は本なり。久遠の本師は妙法なり、本有実成の釈迦・多宝は迹なり。

四十六、下種の序・正・流通文底の本迹 応仏と天台とは正宗一品二半を本門と定む。現文の勝劣なり。報仏と日蓮とは流通を本と定む。文底の勝劣なり。

四十七、下種の撰折二門の本迹 日蓮は折伏を本とし撰受を迹と定む。法華折伏破權門理とは是なり。

- 四十八、下種の二妙実行の本迹 日蓮は脱の二妙を迹と為し、種の二妙を本と定む。然して相待は迹、絶待は本なり云云。
- 四十九、下種の十妙実体の本迹 日蓮は本因妙を本と為し、余を迹と為るなり。是真實の本因本果の法門なり。
- 五十、下種の六重具騰の本迹 日蓮は脱の六重を迹と為し、種の六重を本と為るなり云云。
- 五十一、下種の六即実勝の本迹 日蓮は脱の六即を迹と為し、種の三世一即の六即、案位の理即は開会の妙覚にして、開会の理即は本覚の極果を本と為るなり。
- 五十二、下種の十二因縁並びに四諦の本迹 日蓮は応仏所説の十二因縁を迹と為し、久遠の報仏所説の十二因縁を本と定むるなり。
- 五十三、下種の十不二門の本迹 日蓮が十不二門は事の上の極々の事理一、体用の不二門なり。
- 五十四、下種の十界互具の本迹 唱へ奉る妙法仏界は本、唱ふる我等九界は迹なり。妙覚より理即の凡夫までなり。実の十界互具の勝劣とは是なり。
- 五十五、下種の境智俱実の本迹 脱の境智は迹、種の境智は本なり。名字即の境智は境智俱に本、觀行即の境智は境智俱に迹なり云云。
 意は十界の仏性只一口に呼び顯はずなり。本因口唱の勝る、南無妙法蓮華經なり、初心成仏抄の如きなり。

弘の一に云はく「理は造作に非ざる故に天真と曰ひ、証智円明の故に独朗と云ふ」云云。久遠の理と今日の理と理に造作無し。然れども久遠は事の上の理なり、今日は理の上の理なり。故に知んぬ、本因妙の理は勝れ、今日本果妙の理は劣るなり。是理の本迹なり。是の故に独朗と云ふなり。釈の文に云はく「独一法界の故に絶待と名づく」云云。天台は「唯大綱を存して綱目を事とせず」と。此の釈の意は大綱は本、綱目は迹なり。天台・伝教の修行は綱目、日蓮等の修行は大綱なり云云。

「如来秘密神通之力」と意得べし。是事理の如来の本迹なり。秘密の如来は理性の如来なり、我等なり。神通の如来は世尊なり。秘密は本地、神通は垂迹なり。世々已来常に我が化を受く。「我本行菩薩道、所成寿命、今猶未尽、復倍上数」云云。本迹勝劣其の理甚遠なり。仏若し説かずんば弥勒尚暗し。何に況んや下地をや、何に況んや凡夫をや。

本ほん本げいま化よ乃くし能じんく究じん尽じんしたまへり云云。

妙楽の云はく「具ぐ騰とう本ほん種しゆ」と。本迹勝劣。「故に但名に於て以て本迹を分かつ」と。下種の名の妙法事行の勝劣なる所を判ずるなり。「本迹は身に約し位に約す」と。久遠名字即の身と位とを判ずるなり。「本より迹を垂れ迹は本に依る、迹は究竟くきやうに非ず」と。玄の一に「開かい示じ悟ご入にゆうは是迹これの要なりと雖も、若し顯本おし已はれば即ち本の要と成るなり」と。籤の一に「若し迹中の事理乃至権実無くんば、何ぞ能く長寿の本を顯はさん」云云。

已上種の本迹勝劣畢んぬ。

弘安三年庚辰正月十一日

日蓮花押

南無妙法蓮華經、南無靈山淨土久遠実成多宝塔中大牟尼尊、上行菩薩、日蓮日興に之を授与す。

右此の血脈は本迹勝劣其の数一百六箇之を注す。数量に就いて表事有り。之を覚知かくちすべし。釈迦諸仏の出世の本懐、真実ゆい真実い唯為一大事の秘密なり。然る間万年救護の為に之を記し留む。

就中なかんずく六人の遺弟ゆいていを定むる表事は、先々に沙汰するが如し云云。但し直授結要じきじゆけつちやう付嘱は唯一人なり。白蓮阿闍梨日興を以て総貫首と為し、日蓮が正義悉く以て毛頭程も之を残さず、悉く付嘱せしめ畢んぬ。上首已下並びに末弟等異論無く尽未来際に至るまで、予が存日の如く、日興が嫡々付法の上人を以て総貫首と仰ぐべき者なり。

又五人並びに已下の諸僧等、日本乃至一閻浮提の外万国までも之を流布せしむと雖も、日興が嫡々相承まんだらの曼荼羅を以て本堂の正本尊と為すべきなり。所以は何、在世・滅後こと殊なりと雖も付嘱の儀式これ之同じ。譬へば四大六万の直弟の本眷属有りと雖も、上行薩埵さつたを以て結要付嘱の大導師けつちやうと定むるが如し。今以て是くの如し。六人已下数輩の弟子有りと雖も、日興を以て結要付嘱の大將と定むる者なり。

又弘長はいる配流の日も、文永流罪の時も、其の外諸所の大難の折節も、先陣をかけ、日蓮に影の形に随ふが如くせしなり。誰か之を疑はんや。

又延山えんざん地頭発心の根元は日興が教化とんせの力用なり。遁世とんせの事、甲斐国三牧は日興懇志こんしの故なり。